

鄧石如

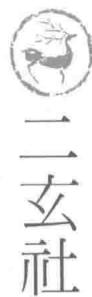
第二三二卷

142.11
第二二卷

清 16

鄧石如

中國篆刻藝術



鄧石如

中國篆刻叢刊

第一二一卷 清16

鄧石如

昭和五九年六月二〇日 第一版印刷

昭和五九年六月三〇日 第一版發行

編集者 小林斗盦

發行者 渡邊隆男

發行所 株式會社 一二玄社

東京都千代田區神田神保町二ノ四二一

電話 〇三一(1163)六〇五一一四番

郵便番號 一〇一

振替 東京四一二八七八一

製版・印刷 株式會社精興社

用紙 北越製紙株式會社

製函 加藤製函印刷株式會社

製本 株式會社彌美堂

3371-08221-5702 無斷轉載を禁ず

編集 || 小林斗盦

目 次

鄧石如

六五 鄧石如字頑伯

完白山人

子才父
文穆公孫

宣城梅氏

惜抱居士
湯懋綱印

笈游道人

江左馬生
趙紹祖印

宣州舊族
畫裏山樓

讓泉過客
博士之孫

鳳橋麟坂舊茅廬

袁枚之印
山口梅家

雨農
周厚輶印

日夕湖山日日春

琴士父
金榜之印

載軒
許鋐私印

家在龍山鳳水
侯雲松字蔭萊

一日之跡
具體而微

輔之柘田
讀古今書

繩伯
一〇一

心閒神旺

柏梘山口人家

紹祖

七二 莖農
七三 燭湖孫氏
七四 世濟忠清

紫電青霜
大好山水居

清素堂
知音者芳心目回

九一 胸有方心身無媚骨

古罍
一〇三

七五 石戶之農

張琦

字叔華

七七 鄧石如

桑棗園

繩伯

七八 完白

小峯

紹祖

龍山樵長

徐震

載軒

鳳水漁長

公威

許鋐私印

小倦游閣

蘭坡

一〇五

家在龍山鳳水

用我法

湯懋綱印

七九 木齋

尊樸齋

九九 桐城姚鼐之印

湯懋綱印

辛卯進士

一〇五

九五 虎門師氏名範之章
武德將軍十三世孫

柳門父
嘉穀

九七 疾學詩印

文園

公威

公襄父

丹徒布衣

一〇五

九九 桐城姚鼐之印

湯懋綱印

課香盦主

漁樵寄此生

範我馳驅

一〇七

與古爲徒

竹窗華雨

浮大白讀異書

自在峰

我便要浮查到日月邊

二分明月一聲簫

東道若逢相識問

一生辛苦爲情多

從來好境遍人間

寸心言不盡

一肚皮不合時宜

繞屋皆青山

一一一

小將就軒

讀畫樓

暫得於己快然自足

念宛齋

桃江漁者

粲華齋

停中區以元覽

河聲嶽色

畢沅秋飄之章

家住靈巖山下香水谿

邊

資料

聊浮游以逍遙

半千閣

清素堂

意與古會

雷輪·子興·古歡

燕翼堂·守素軒

(五面印)

江流有聲斷岸千尺

筆歌墨舞

新篁補舊竹

太羹玄酒

逸興遄飛

休輕追七步須重惜三

餘

事無盤錯學有淵原

折芳馨兮遺所思

振衣千仞岡濯足萬里

流

鐵鉤鎖

卻將八法寫湘君

心閒神旺

鄧石如

完白

鄧氏赤玉一字石如又

字拾餘亦字實愚別

字識漁

鄧氏赤玉一字石如又

字拾餘亦曰實愚別

字識漁

石如臨古小印

完白館

家在龍山鳳水

掘翠樓珍藏印

大好山水居

若行若藏

滿眼江湖猶未歸

允纘

小峯

古歡

安吳包氏白子又第十

世臣私印

包慎伯氏

肅啓

鳳馳

公襄

宣城梅氏

宣州舊族

農學焉

文埴私印

齊遜

梅泰之印

特恩賜蟒

一五七
山口梅家

雲海

愛画工書能琴善病

謫住蓬萊

一五九
御題承學堂

滿架秋風扁豆香

八月某華艸堂

清素堂

一六一
胸有方心身無媚骨

人隨明月月隨人

一六三
拈華微笑對酒當歌

以介眉壽

一六五
虎門師氏名範之章

武德將軍十三世孫

一六七
浪蕪書堂

侯學詩印

一六九
鄧石如

小倦游閣

木齋

子才父

文穆公孫

江左馬生

一七一
趙紹祖印

琴士父

瑤楓

柏槐山下人家

徐震

公威

一七三
蘭坡

用我法

包五十

尊樸齋

困學之子

自然幽雅

袁枚之印

梅泰之印

金榜之印

輔之柘田

一七七
讀古今書

樹頭篩景月朦龍

一七九
鄧石如の生涯と篆刻

藝術

馬國權

林宏作譯

一八九
(解說) 小林斗盦

一九五
中國印人傳彙編

林宏作譯

一九九
—側款釋文— 黃天

凡例

- 一、本叢刊は、中國近世の篆刻作品を各時代、各作家に分つて網羅する。
- 一、本冊は鄧石如の作品からなる。
- 一、鄧石如の作品は、古くより後人の手に據る摹刻があることで知られ、これに貴重な作品が多數含まれる。このため後人の摹刻を實作の後に“資料”として付載した。
- 一、印影の配列は原則として制作年の順序に従い、款記のない作は推定によつて配列した。
- 一、“資料”では實作の配列順を遵守し、王爾度のものを先に、張咀英のものをその後に付し、それぞれ區分した。
- 一、收錄の印影は各種印譜、書畫の類より最良のものを選ぶことにつとめた。ただし鈐拓の悪いものも、重要と思われるものは適宜採用した。
- 一、釋文中、拓款がなく款文を記録するものは諸文献に據つたものである。
- 一、卷末には、歴代の印人傳中より作家の傳記を摘出し、その口語譯を“中國印人傳彙編”として掲載した。

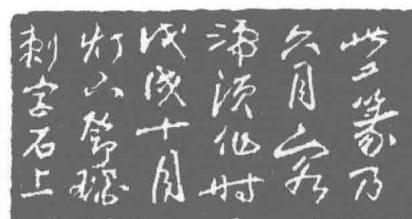
鄧石如

〔聊浮游以逍遙〕

此二篆乃久月客濡須作。時戊戌十月燈下。鄧

琰刺字石上。

乾隆四三年(一七七八)三六歲作

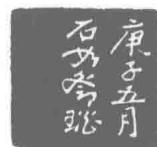


〔半千閣〕

庚子五月。石如鄧琰。

某文穆公。卜白下之居。人咸陋之。涇上趙侍
御。登閣指古柏曰。值五百金。第五子因以名
閣。石如并志。

乾隆四五年(一七八〇)三八歲作



〔清素堂〕

念其家計清素。王午南巡詔也。文穆公感主知。

名其堂以訓子孫。第五鑄請古浣鄧琰篆。乾隆庚子夏。

乾隆四五年(一七八〇)三八歲作

〔承學堂·兩地青磚〕

石如筆。庚子秋。

乾隆四五年(一七八〇)三八歲作